

山形県鶴岡市

人口11万5,562人・世帯数4万9,527世帯（令和7年5月末）。山形県庄内地方南部に位置し、西は日本海、南は新潟県に接する。平成17年10月、鶴岡市（旧）、藤島町、羽黒町、櫛引町、朝日村、温海町が合併、東北地方で最も広い自治体となった（1,311.53km²）。庄内藩の城下町として栄えた中心市街地をはじめ、周辺は地味豊かな地域で、数百年をかけて多様な食文化が育まれ、平成26年、日本で初めて「ユネスコ食文化創造都市」に認定されている。

鶴岡市

山形県



民間との連携で実現した交通デザイン

住民の“日常”を守る

JIAMでは、令和6年11月27日～29日の3日間の日程で、「地域公共交通の維持と確保に向けて」をテーマに研修を実施しました。

人口減少と少子高齢化が急速に進む日本で、地域公共交通の必要性、そして地域を支える持続可能な公共交通を作り出すために自治体がなすべきことや、その仕組みづくりについて学びました。

今回は、運行事業者や地域住民との連携・協働により大幅な利用者増を達成し、優良事例として国土交通大臣表彰を受賞した山形県鶴岡市の「市内循環バスの再編」事業についてご紹介します。

城下町を走るバス

明るい日差しの中、街中を黄色と白にペイントされた小さなバス(12人乗り)が軽快に走る。鶴岡市の市内循環バスである。3ルートそれぞれに右回り・左回りがあり、6ルート合わせて1日48便走っているから、市内のあちこちで目に入る。小回りがきくバスは、城下町特有の狭く曲がった道にも対応し、歴史ある街の風景にとけこんでいる。

鶴岡市内循環バスの運行開始は令和4年10月。令和2年度に策定された「鶴岡市地域公共交通計画」に基づく事業である。平成28年に「地域公共交通網形成計画」を策定したが、当時は合併前の各自治体の交通システムを踏襲し、さほどの課題もなく運行していた。しかし、急速な人口減が、令和に入り事態を深刻化させた。

当時の状況を説明してくれたのは、鶴岡市企画部地域振興課の齋藤眞一さん。「鶴岡市は、東京都23区の2倍の広さの市域です。計画では、旧町村エリアは地域内交通により地域拠点に人

を集めて市街地に送る手段をとり、市街地では利便性の高い市内循環バスを再編することになりました」。折しも、市のバス運行を担う庄内交通株式会社でも、住民の48%が住む地域でバス利用者が少ないことを問題視し、利用しやすいルート設定や徒歩圏内のバス停の設置などを市に提案していた。一方で計画策定のため市民アンケートを実施すると、「バス停が遠い」、「いつ走っているかわからない」、「料金がわからない」といった声があがり、バスの存在そのものの認知度の低さが浮き彫りとなった。これらの問題点を解決するため、市と事業者は2年をかけて、バス運行の再編業務に取り組むことになったのである。

全市挙げて取り組んだ交通再編

市内循環バスの再編

ルートの作成では、国勢調査による高齢者の独居世帯の多い地域を意識し、家から徒歩圏内の距離にバス停の増設を検討した。「ルートは庄内交通さんがさまざまな要件を調整して作ってくれましたが、試走すると、次々と課題が出てきました」と齋藤さん。夏は問題のない道路でも、除雪が必要な冬季にも利用できるか。城下町特有の狭くクランクが多い道路にルートを作れるか。高齢者の意見をどこで集めるか……。路線の選択のほかバス停の設置一つにしても、民間だけでは解決できない小さな問題が山積した。そのた

め市では、土木、都市計画、福祉、観光など多くの関係部署が動いた。土木担当は道路の確認を、高齢者の声については福祉担当、住民自治組織にはコミュニティ担当が事業者と住民のパイプ役となった。これら市内の横のつながりが、問題の一つひとつ解決していったのである。

一方、大規模再編成には車両の購入や人件費の増加などにより、初年度にかなりの経費が発生する。しかし、中途半端な再編では効果はない。市は財政担当と話し合いを重ねた。そして事業者は一部経費負担の協力を申し出した。

再編成の実現が見えてきた令和4年夏、法定協議会による審議や各種申請を実施、市内循環バスは生まれ変わった。結果、官民連携により市内循環バスは市民に周知されて大幅な利用者増



エスモールバスターミナルに掲示されたバスの時刻表
再編前は土日は休休、平日も1日12便だった運行も大きく様変わりした。



再編された市内循環バスルート 3ルートが市内をそれぞれ40分かけて巡る。拠点となる駅や市役所などで他ルートに乗り換えることもできる。いずれは、あともう1路線増やせたらという夢も……。



運行当初のバスは白色だったが、雪の時期は視認しにくく、介護や他の送迎バスに紛れ、存在感があまりないため、半年後、黄色に変更した(鶴岡駅前バスロータリー)。

につながり、この事業は地域の模範となる優良事例として国土交通大臣表彰に輝いた。

地域交通の運行

交通事業の採算を追求し、減便などの合理化を目指せば、住民の利便性は損なわれる。そこで市内循環バスの運行では市民の利便性を重視し、利用者増加を図った。一方、民間事業者が撤退した路線沿線地区の一部では、住民の移動手段を確保するため、市が自家用運送の許可をとって公用車を活用し、タクシー会社に委託して市営バス3路線を運行している（令和7年7月現在）。また、各地域内運行についてはそれぞれ地域協議会を設置、各地区の分庁舎に事務局を置き、問題や要望の解決に取り組んでいる。

また、利用者数などを適時分析し、定期・デマンド運行等の実施の検討、柔軟な対応で交通空白地域の解消を目指している。令和7年度、路線バスや市営バスが廃止された藤島地域と朝日地域では、鶴岡の市街地を結ぶ定時定路線型バスと地区内のデマンドタクシーの複合型による運行を実施している。

齋藤さんは月に数回、自宅から市街地まで市営バス通勤しているとのこと。「乗客数や売り上げは数字で把握できますが、乗車してみると、どんな人が利用しているか、乗り降りの場所、ICカード利用の実態など、利用の実像が見えて、気づくことも多いですね。交通担当としては、“バスに乗る”のも重要な仕事だと考えています」。



温海地域乗合タクシー「湯ったり号」

温海地域



JR あつみ温泉駅



JR 藤島駅

藤島地域

定時定路線型バス「ふじつる号」



鶴岡市公共交通概要図

やまぶし温泉「ゆほか」

羽黒地域



羽黒地域市営バス「にこここバス」



朝日地域



新朝日庁舎

定時定路線型バス「あさひバス タキタロウ号」



櫛引地域

櫛引地域デマンドタクシー「くしびっき」



路線バス乗継乗降場所

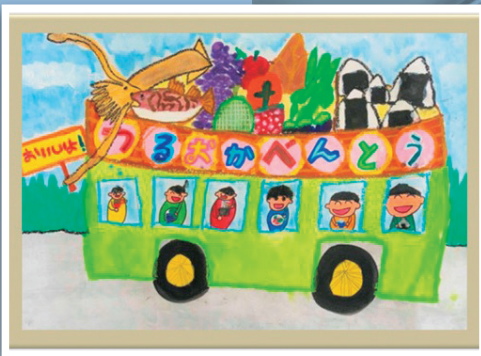
- 庄内交通バス路線
- 市営バス等路線
- - - 鉄道路線
- デマンド交通等区域
- 市内循環線運行エリア



市内循環バスの乗降口 乗降しやすいように手すりを設置するなどの改造がされ、ドアの開閉とともに自動的にステップが動く。運賃は300円均一だが、ICカードの導入によりいっそう便利になった。



市内循環バスに混じって、羽黒地域市営バス「にこここバス」が地域拠点病院の荘内病院に到着した。



「小学生バスの絵コンテスト」はすでに10年の歴史をもつ。当初、バスの車体に掲示していたが、バスに乗ってもらいたいという意図で、バスの中に掲示することに。



「つるおかまちあるきマップ」には、バス路線やバス停の地図とともに、城下町鶴岡ならではの歴史・観光施設、グルメ情報が掲載されている。



共通目標は“利用者増”

鶴岡市の市内循環バス再編成の成功の背景には、官民の円滑な連携があった。齋藤さんはこう話す。「最初のうちは遠慮もありましたが、地域の状況を熟知している庄内交通の担当者さんと頻りに打ち合わせるうちに、ざっくばらんに意見を交わせるようになっていきました。行政と民間という立場の違いはありますが、同じ問題に取り組む同志のような心持ちでいます」。

そこには「利用者を増やす」という共通の目標があった。一つの事例がある。運行開始からほどなくして、ルート変更が検討されることがあった。現状ルートの継続も考えられたが、変更により利便性が高くなる。そのため、事業者は面倒な申請手続きが、市は市で補助金関係の各所への説明、協議会の開催など、面倒で細かな調整が

必要となる。しかし、両者とも“面倒”は二の次で作業に入った。利用者が増えると考えたからこそその動きである。

事業者は、バスの利用者増のためのチラシのポスティング、ICカード利用の販売促進等の営業を行うが、市も高齢者の会合やイベントを紹介するなど、営業活動に協力している。

“未来”に向けた乗客を獲得するための努力も惜しまない。市は、徒歩で通学し、バスになじみのない子どもたちに関心をもってもらうため、「小学生バスの絵コンテスト」を開催した。優秀作品はバス車内に掲示される。

一方で、市内循環バスは意外な影響ももたらした。バスが認知されていくにつれ、小型バスなら運転できるかもしれない、運転士希望者が名乗り出るなど、ドライバー不足にも貢献しているという。バス利用者からは「親切に対応してくれる」と運転士の仕事ぶりも評判がよい。

また、土日の利用者を獲得するため、

バスを利用した「つるおかまちあるきマップ」を作成したところ、気軽に市内を回れるルートとあって、市民だけでなく、観光客からも好評を得た。

齋藤さんは言う。「再編成後、多くの住民の方が市内循環バスを認知してくれて、要望も増えてきました。それらに対応するためには、交通法規・システム、道路状況の把握など日々の努力が欠かせません。地域交通の維持は、民間事業者なくして成り立ちませんので、それぞれの立場の状況を見極め、住民の意見を調整しながら、よりよいシステムを目指していきたいと考えています」。

交通デザインの再構築は、住民の“日常”を守り、市の活力を再生させる一歩となった。人口減少が進む各地の自治体では取り得る施策の幅は限られるが、官民の密接な協力により、全体最適を目指した交通システムのデザインが可能であることを、鶴岡市の事例は教えてくれる。

【取材・写真提供 鶴岡市企画部地域振興課・庄内交通株式会社乗合バス事業部】



「バス運転体験会」の募集チラシ

バス運転士の仕事に興味ある人を対象に、運転や車内機器の操作体験、採用募集内容の説明などが実施された。



事業者の協力を得て、地域の高齢者の集まりや市内の保育園などで「バスの乗り方教室」を実施。